

大正末期から昭和初期におけるスポーツとラジオ ～野球とオリンピックの実況放送を中心に～

Sports and radio in the late Taisho and early Showa era
～Mainly on play-by-play broadcasting of baseball and the Olympic games～

1K04A189-1

原 元

指導教員

主査 石井昌幸先生

副査 宮内孝知先生

はじめに

現在、スポーツは社会に広く浸透している。大衆化していると言ってよいだろう。では、その始まりとはいった頃であったのであろうか。ここで私は、スポーツ狂時代などと呼ばれる大正末期から昭和初期に焦点を当てた。この背景に、新しいメディアであるラジオが誕生し、影響を与えたと考えるからである。

これらを解明するにあたり、甲子園、第10回ロサンゼルス・オリンピック、第11回ベルリン・オリンピックのスポーツ実況に目を向ける。これらのスポーツイベント、スポーツ実況が日本国民を熱狂の渦に巻き込んだからである。本研究は、スポーツとラジオの関係を読み解き、相互に及ぼした関係を考察していく。

第1章

第1章では、ラジオ放送開始以前のスポーツの在り方、そして日本においてどのようにラジオが始まり、人々に普及していったのかについて述べる。

1900年代に入り、日本は欧米先進国の文化を吸収し近代化を図るようになる。この時期に誕生した近代的な新聞は人々に普及し、その中にはスポーツ記事も存在した。雑誌に関しても教育的内容のものだけでなく、趣味的なものが誕生する。また、スポーツとメディアの関係についても、新聞社がスポーツイベントを主催するなど、スポーツが教育的から趣味的なものへ移行し、人々のスポーツへの関心が高まっていた。

日本初のラジオ放送は、1925年3月22日であった。一部のマニアのものであったのを民衆に広く知らしめたのは新聞社であった。そして、ラジオは欧米スタイルに学ぶ都市生活のステータスとして、都市を中心に普及していくのであった。

第2章

本章では、スポーツ実況中継の中で特に人気の高かった野球のスポーツ実況を取り上げる。そして、野球のスポーツ実況アナウンスの変遷を辿り、如何にしてスポーツが普及していったかを述べていく。

初のスポーツ実況は1927年6月18日の大相撲中継であった。その2ヵ月後、甲子園で野球の実況中継が始まる。これが、現在までに繋がるスポーツ中継放送の先駆けである。ラジオの誕生により生まれたのがライブ感と共時性である。これが、スポーツと上

手く結びつく。ここに、メディアを通してのスポーツ観戦者が誕生する。ライブ性を追求した結果、話芸的と言われる実況アナウンスが人々を魅了していく。これはスポーツを読み解く力のない人々にも受け入れられ、スポーツ実況が娯楽化していく。つまり、スポーツが地域的・階層的に普及していくのである。その後、台頭してきた都市的モダニズム、スポーツ通らの出現により、ライブ性を置き去りにしてしまった話芸的アナウンスは影を潜めるようになる。

第3章

ロサンゼルス・オリンピック、ベルリン・オリンピックのスポーツ実況を取り上げることで、当時の日本国民が抱いていた欧米に対する劣等感やナショナリズムについて言及していく。

第10回ロサンゼルス・オリンピックは、ラジオの放映権料の関係から実況中継が行われなかった。日本は他の国とは異なり、実況放送という新たな実況スタイルを生み出す。それは、スポーツ実況が娯楽として、人気を介していたからである。また、満州事変を通じ、世界から孤立化していく日本の中で、人々のナショナリズムがラジオ放送にも如実と表れてくる。

初のオリンピック中継が行われたのは第11回ベルリン・オリンピックである。その背景には、ナチスによる国威発揚としてのオリンピックの性質にあった。「前畑がんばれ」や日の丸抹消事件を起こしたマラソンのアナウンスにおいて、日本国民が持つナショナリズムが巨大化していくのがうかがえる。

終わりに

日本国中を熱狂させたスポーツ放送は、戦争が肥大化するにつれ、衰退していく。

従来のメディアにはなく、ラジオにあったものはライブ性と共時性であった。メディアを通してのスポーツ観戦者を生み出したラジオはスポーツが大衆化するにあたり、重要なアイテムであったのである。また、ラジオにとってもスポーツはライブ性を活かせる最適なコンテンツでもあった。それほどまでに人々にとって、身近なものになっていく。その後、スポーツ実況は大衆の想いを代弁するほどまでになる。スポーツとラジオがお互いに相乗効果をもたらしたのである。その結果、スポーツ狂らと呼ばれる時代を生み出し、スポーツを大衆化させたのである。